くろしおの想い出

船長　比　嘉　幸　一

〝くろしお〟就航後、半年位した頃のことですが、当時海洋観測の定線は神山島南をST.1として慶良間の北から久米島の東までで折り返して渡名喜島、粟国島の南より名護湾まででした。命を受けて那覇港を出港し、順番に観測をしていましたが、昼頃より南東の風が次第に強くなり波も高く、午後7時頃瀬底島の東側錨地に投錨しましたが、錨が曳かれて停泊出来ず、名護湾近くの島影で三錨投錨しました。しかし、風がさらに強くなり、波も高くなって停泊中の本船の船首より大波をかぶり、錨曳又は索切れしたら大変と思い、主機エンジンを始動させ、船を風上に向けて走らせるようにして、この荒天をしのぎました。

昭和43年頃だったでしょうか、慶良間での鰹のエサの活魚試験の調査を終って那覇港向け帰港中、渡嘉敷島から前島間で横波を受け、傾斜がひどくもう少しで大惨事になるところをあやうくのがれました。当時は〝くろしお〟乗船まもなくの頃で、船の復原力が私にとって未知だったと思います。その日は北の風12m位と思っています。〝くろしお〟の就航当時より現在に至るまでには色々の調査試験がございましたが、特に人命、財産にかかわる此の2件はいつまでも〝くろしお〟乗船中のおもいでとして私の心に残ることでございましょう。

元機関長　金　城　万　栄

建造まもない〝くろしお〟でカツオ餌料調査のため阿護ノ裏入口に停泊した。春の暖い夜のことだった。夕方より集魚灯の点灯を始めたが、なかなか小魚が集って来ない。夜中近くになって少々集って来たが、午前2時頃海中深い所です早く動きまわっている大きな魚がいたので、小魚をタモで取って、弱らせて動きをにぶくし、放してやると下で動きまわっていた大きい魚が浮上して来たので、それがカツオであることがわかり「それ、カツオが餌についた！」と言って、カツオ釣を準備して釣り始めた。おもしろい程つれたが、たたき起こされた皆さんは、竿を海に入れるやいなや、カツオに引かれるやら、釣り揚げ、はずすやらでてんやわんやのおうそうであった。釣り揚げたカツオは80尾、1尾3kg程であった。結局その日はカツオシオの餌はとうとう朝まで集ってこなかった。

機関員　宮　城　吉　男

〝くろしお〟は、糸満造船所で造られ1966年の８月15日に進水し、14年間に渡り漁業調査船として活躍し現在に至った。

〝くろしお〟の主な仕事内容として、大型魚礁調査、放射能調査、沿岸定線調査、えさの調査などいろいろありますが、特に僕が興味を持ったのはえさの調査である。えさの調査とは、沖縄の海では鰹を取るためのえさが確保できず、本土の方から取り寄せている次第なのです。このような問題をかかえていては、漁業活動がおもうようにできないので、水産試験場では県内で直接確保できるように研究と調査を重ねています。これからも水産試験場がますます発展しますように。

漁業室　金　城　武　光

私と〝くろしお〟とのつきあいは、昭和41年まだ船体が造船所のレールの上に乗っていた頃に始まる。

〝くろしお〟の種々の業績等は他の皆さんの筆に委ねるとして、私は航海中に起きたおもしろいできごとを書いてみたいと思います。

建造当時の〝くろしお〟は船内にトイレがなく、１ｍ四方に高さ70cm程の箱を船の舷にひっかけて用便をしたものであるが、使用中は頭だけが見えるためその姿は卵をあたためている〝アホウ鳥〟そっくりで腹をかかえて笑ったものである。私が始めて使用した時〝これはへたすると落ちるぞ〟という予感だけが先にたち、出かかったものがひっこんだのを今でも覚えている。それからしばらくして私の予感が的中したのである。乗組員きっての巨漢であるＭ氏が用便中トイレもろとも転落してしまったのである。びっくりしたのは本人よりむしろ他の乗組員で、巨漢のＭ氏を船上へひっぱり揚げるのに苦労したとか。それにしてもトイレとアベックで海水浴を楽しんだ話は前代未聞である。

目的地（調査地点）へ向って航行中に曳縄を流すのは〝くろしお〟に限らず、すべての漁船が行っている漁法であり漁獲物として、カツオ、マグロ、サワラ、シイラ等があるが、人間が釣れたのは聞いた事がない。当時20才に満たなかったＴ君、出港と同時に曳縄を流し終り、尿意を催したのでデッキから海へ向って放水すべく姿勢を整え〝ヒョイ〟と顔をあげると、岸壁でうら若き乙女が〝くろしお〟を見送っていたのである。純情なＴ君は一瞬うろたえたが気をとりなおし〝アランタルフーナー〟をして反対側のデッキへ行き、今度は注意深く周囲を確認してから同じ姿勢をとった。人間だれしも放尿時は安心しきっているものであるが、その時うねりで船体が大きく傾いたからたまりません。Ｔ君必死で手摺をつかもうとしたが時す